

【翻訳】

コンラート・フォン・メーゲンベルク
『自然の書』(第3章:動物)〈中編〉

萩野 蔵平 訳

Konrad von Megenberg: „Das Buch der Natur“.
(III. HIE HEBT SICH AN DAZ DRITT STÜCK DES PUOCHES.
A. VON DEN TIEREN IN AINER GEMAIN.)

übersetzt von Kurahei OGINO

要旨

„Das Buch der Natur“, das zwischen 1347 und 1350 von Konrad von Megenberg verfasst wurde, ist die älteste bedeutende Naturgeschichte in deutscher Sprache. Es ist weitgehend eine Übersetzung von Thomas de Cantimprés „Liber de natura rerum“ (zwischen 1225/26 und 1241 entstanden), enthält aber auch neue Beobachtungen und Ergänzungen. Dieses im Mittelhochdeutschen verfasste Lehrbuch war auch in Laienkreisen lesbar und fand rasch sehr weite Verbreitung (über 100 Handschriften). Die folgende japanische Übersetzung, der die von Franz Pfeiffer herausgegebene Textausgabe „Das Buch der Natur“ (1861/1994) zugrunde liegt, behandelt den mittleren Teil des dritten Kapitels „Von den tieren in ainer gemain“.

キーワード: コンラート・フォン・メーゲンベルク (Konrad von Megenberg)、『自然の書』(Das Buch der Natur)、トマ・ド・カンタンプレ (Thomas de Cantimpré)、『事物の本質についての書』(Liber de natura rerum)、自然誌 (Naturgeschichte)。

はじめに

以下は、コンラート・フォン・メーゲンベルク著『自然の書』(Konrad von Megenberg: „Das Buch der Natur“, 1347~1350)の第3章「動物一般について」の中間部分(24節から51節まで)を訳出したものである。底本には、Pfeiffer版(1861/1994)を使用し、Schulz(1897)とSollbach(1989)の2種類の現代ドイツ語訳を適宜参照した。なお本訳文では、読みやすさに配慮して、適宜段落分けを行った。

『自然の書』は、ドイツ語で書かれた最初の自然科学書であると同時に、100点以上の写本が現存していることからわかるように、中世・近世において最もよく読まれた著作の一つである。しかし

ながらその存在は、日本においてはまだ十分に知られているとは言えないため、前半部分の訳（熊本大学文学部『文学部論叢』第104号、2013年、pp. 89-105に掲載）に引き続き、今回もその内容を紹介したい。その内訳は以下の通りであるが、そこには実在の動物の他に、存在が特定できないあるいは空想上のものと思われる動物なども多く含まれている：

24. ゾウ、25. ウマ、26. ハリネズミ、27. ファレナ、28. ハムスター、29. フリオン、30. ネズミ、31. イタチ、32. レーセル、33. ヘラジカ、34. イノブタ、35. ヤマアラシ、36. ハイエナ、37. ライオン、38. チーター、39. ヒビ、40. ラーツァン、41. オオヤマネコ、42. オオカミ、43. リンゼン、44. レオカフエ、45. ウサギ、46. カワウソ、47. ロクスト、48. ラバ、49. 獵犬、50. ジャコウ、51. ネコ。

なお本翻訳は、長年続けているドイツ語輪読会において行っている本書訳読作業の成果の一部であることを記し、そのメンバーとして熱心に参加していただいた吉田李佳、岩佐銘江の両氏にここに改めて感謝申し上げます。

【訳】

第三章

24. ゾウについて

elephasとはゾウのことである。ゾウにはすぐに人に慣れる性質があり、この動物ほど飼い慣らしやすく、従順な野生動物は他にはいない。また記憶力に優れているため、必要とされるあらゆる仕事を器用にこなすこつを簡単に身につける。アリストテレスは、多くの動物には見たり聞いたりしたことをよく記憶する力があると述べている。しかしそれは、理性を持たない生物が持つ力のことであり、理性を持たない創造力、あるいはラテン語で*estimativa*と呼ばれる力のことである。だが動物には理性的な記憶力は認められない。それを持つのは人間だけだからである。

ゾウは狩りをされるときには、固い地面や石の上に倒れこんで象牙を折ろうとする。それは象牙のゆえに殺されないためである。なぜならば、象牙はとても高価であるからで、それはラテン語で*eber*と呼ばれる。ゾウは臍がある場所以外は丈夫にできている。ゾウたちは星の光加減に従う。というのも、月が満ちてくると整然と水の中に入り、体が濡れると太陽が昇る方向に進んでいき、体を乾かすために可能な限り何度も飛び跳ねるからである。しかも、それを頻繁に行うのである。ゾウは鞭と体罰を用いると人に慣れる。ゾウたちが水を渡る時には、仲間のうちでもっとも体の小さいものを先にやる。それは大きなゾウが水底を踏みつけて川を深くすることを避けるためである。ゾウはつねにドラゴンと戦う。プリニウスは、ゾウは隠れた場所以外では決して交尾しないと述べている。それほどまでにゾウは、そのような行為を恥じるのであるが、交尾をした後は、前もって体を水で洗ってからでないと仲間の群れには戻らないという。

ゾウはメスをめぐり争うことはない。姦通をしないからである。母親ゾウが出産するときには、赤ん坊が地面に落ちないように深い水の中に入る。そうしないと赤ん坊は起き上がれないであろうから。

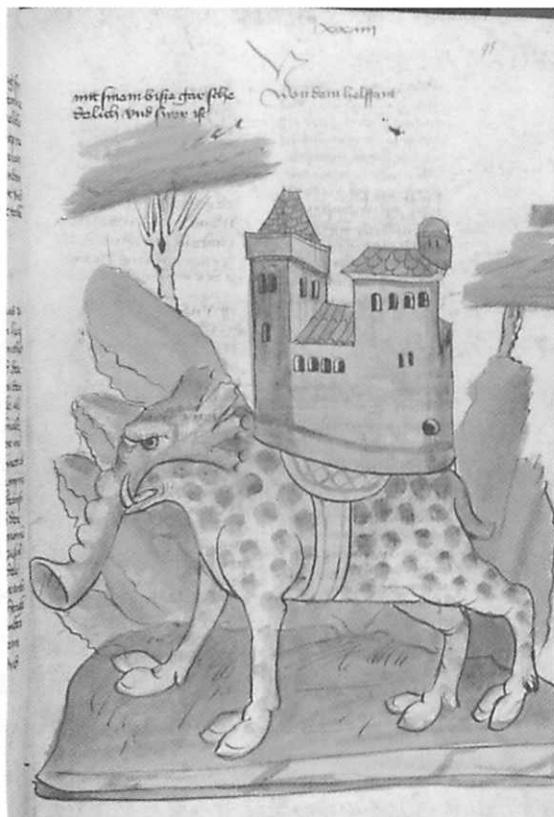


図1 「ゾウ」

出典：Gesamtverzeichnis

母親は出産から回復すると、3年間は休養し子供を産まない。また、妊娠したメスにオスが触れることは決してない。メスは3年間子供を腹に宿す。ソリヌスは、ゾウが交尾をするのは2年間で2日だけで、それ以上はしないと述べている。

ゾウは、ネズミを恐れて逃げ出すという。その匂いに耐えられないからである。ゾウの背中は大変固いが、腹部はそれよりは柔らかい。他の動物たちは、ゾウの内臓や皮膚が発する匂いを嗅ぐと逃げ出してしまふ。ゾウは生来300年生きるといわれる。また寒さに耐えることが苦手である。ヤコブスによると、その象牙はとても冷たく、白い色をしているという。象牙を布で包み、熱い木炭の上に置いて、そのことを試してみることができる。象牙が持つ自然な冷たさによって、布が燃えることもないし、火も消えてしまうからである。ソリヌスによると、ゾウは怪我をしているか、疲れて逃げられなくなった時以外は、人間に危害を加えることはない。というのも、その場合には身を守らねばならないからである。ハエがゾウの背中にとまったときには、皮膚に皺をよせ、ハエをそれに挟んで

殺す。ゾウには、身を守るべき尾がないからである。ゾウの体内は、他の陸上動物とは違うつくりになっていることを知みなさい。だがアリストテレスは、ゾウの体内はブタと同じであると述べている。もしそうであれば、ゾウの体内は人間のそれと同じことになる。火で焼いた象牙は、ヘビとその毒を追い払ってくれる。

幾人かの人たちはこう述べている。ゾウが怒り出し、他の動物や人間と争おうとする時には、ゾウに赤い色の水か赤ワインを見せ、ブーブーうなるブタを目の前に連れてくるとおとなしくなるといふ。またこう述べる人たちもいる。ゾウは、若い時には膝を曲げることができるが、年をとるとそれができなくなる。膝が固くなるからである。それと同様に、若い聖職者や修道士たちは、腰を曲げて重労働に勤しむことができるが、年をとるとその体力もなくなる。若いゾウには、長老のゾウが転ぶと、ラテン語でpromuscides、ドイツ語でslauchまたrüzetelと呼ばれる長い鼻で助け起こしてやるという習性がある。助け起こした後で体の節々が痛むようであれば、冷たい水を飲ませ、蜂蜜を振りかけた草を与えてやれば、また元気を取り戻す。ゾウは、生まれつきワインを好んで飲む。ゾウは40年間かけて成長し、その後、霜や冬の寒さ、そして寒風の冷たさを知るようになる。若く学識のある人々もちょうどそれと同じことなのである。ところで、ゾウが持つある美德について覚えておくとよい。ゾウに言うことを聞かせようとするのであれば、人はきびしく叩かねばならないが、叩くことから解放

してくれた人に、ゾウはその後いつまでも従順になる。ドラゴンは、いつも腹一杯水を飲んだ後のゾウをねらう。それと同じような時に、悪霊も人間をねらうのである。

25. ウマについて

ラテン語でequusはウマのことである。元気で優秀なウマは、水を飲むときに鼻を水中深く沈める。イシドールによると、この動物の歯は年をとると白くなるので、歯でその年齢がわかるという。すべての動物の中でも、ウマにおいては耳でその性格がわかる。なぜならば、元気なウマは耳が短い、不精なウマは耳が長いからである。動物の中で、ウマとウシとシカには心臓の中に軟骨でできた骨があるが、それはそれらの動物の体が大きいために、そうすることで心臓の形がより安定するからである。それは他の部位においても、軟骨が支えとなっているのと同じことである。しかし、これはシカのところですでに述べたことであるが、治療力があるのはシカの心臓の骨だけである。つまり薬となるのである。

雌ウマあるいは母ウマには、仲間のウマが死ぬと、死んだウマの替わりになって子供に乳を与えるという性質あるいは慈悲深い心がある。ウマは、他の動物よりも互いをたいへん慈しみ合う。アレクサンダーによると、気高いウマは、主人の死を泣き悲しんで知らせるといふ。また、すべての動物の中で、人間を除き、ウマだけが涙を流し主人の死を悼むのである。それは時として何も口にせず、餓死してしまうほどである。アリストテレスは、人とウマは他の動物よりも性交を好むと述べている。かつて一人の王がいて、彼は美しい母ウマとその子ウマを飼っていた。さてその王は、その子ウマによって母ウマを孕ませようとし、母ウマに目隠しをした。するとその子ウマは母ウマと交合したのである。しかしそのようなことが起った後で、相手が母ウマであることに気付いた子ウマは、そこから逃げ出し、体を激突させて命を絶ったという話である。ミヒヤエル・フォン・ショットラントは、ウマは母ウマと交尾すると述べている。だが事が終ると、ウマは自らの睾丸を砕いて命を絶つのである。アリストテレスは、ウマの尾からとった毛を水に入れておくと、数日のうちに一匹の虫が発生すると述べている。

26. ハリネズミについて

ラテン語のerinaciusは、ドイツ語でigel（ハリネズミ）のことである。別名cyrogrillusと呼ばれると、ある聖書注解は、食べることが禁じられている不純な動物についての箇所述べている。しかし私はそうは思わない。私の考えでは、cyrogrillusとは別の動物であって、それはこの二種類の動物の特徴を見ればわかる。実際学者たちは、これら二つの名前の動物について別々に書いている。もしここでいう二つの動物が同一のものであれば、そうはしないであろうから。いずれにせよハリネズミは、皮膚に生まれつき針のある動物で、腹部がブタのようになっている。危害を加えるものがあると、全身くまなく針で囲む。ある人たちは、ハリネズミが食べた物は、その大部分が針に変わると述べている。この動物には、生まれつき体熱がないからである。

ハリネズミの肉には、胃に良く効いてその働きを強くし、胃を乾燥させて便通をよくする働きがある。また尿の排出を良くし、象皮病になりやすい人に効果がある。ハリネズミだけが、排便のために

二つの肛門を持っている。ハリネズミを焼いた灰を、溶かした松脂や樹皮と混ぜあわせたものには、頭やそれ以外の部位の傷跡に、再び毛を生じさせる効能があるとプリニウスは述べている。またアリストテレスによると、ハリネズミは立ってメスと交尾するというが、それはメスの背中中の針がオスに刺さらないようにするためである。だが私は、メスは仰向けになると聞いていて、それが本当だと思っている。なぜかといえば、そのほうがずっと楽だからである。

27. ファレナについて

*falena*¹は遠い国々に生まれる動物で、この動物を神は、傲慢な人々を罰するために創造されたのである。というのもこの動物は、人間の傲慢を軽蔑し、憎むように生まれついているからである。この動物が傲慢な人間と戦う時には、倦むことなく戦い続け、勝利を取めると、打ち負かした相手を容赦なく引き裂いてしまう。しかし、謙虚な人間がやってきて、怖くなって逃げ出したりすることで彼らが謙虚であることがわかると、この動物は、しばしばじっと立ったまま、彼らを通してあげるのである。

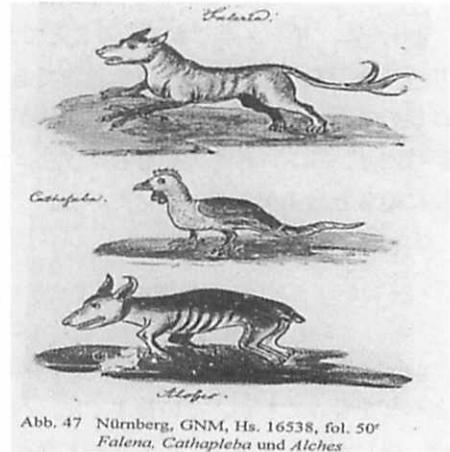


図2 「ファレナ」(一番上)

出典：Spyra (2005), Abb. 47

28. ハムスターについて

*furunculus*²とは、我々の言葉ではgrütz (ハムスター) と呼ばれる動物のことである。この動物は勇敢だが、その生まれ持った力以上に乱暴で、体の大きさはイタチよりやや小さい。この動物は横になって交尾をする。メスは、盛りがついた時にオスがいないと、体が膨張して死んでしまう。

29. フリオンについて

*furiôn*³は、アリストテレスが言っているように、淫乱な動物で、餌を腹一杯に食べ、餌のためであればしばしば命も厭わない。そして、その過剰な淫乱さのゆえに、長生きすることができない。この動物は、他の動物よりも性交にいとまがない。というのも他の動物よりも食欲旺盛だからである。盛りがつくとオスはメスの上に登り、ウマが歩くような動きをする。この動物は、過剰な欲情が求める行為を完全に果たすことができない時には、大声をあげ、発情期におとなしくしていることができない。

ところで、自然というものは、過剰な欲情に耐えることができず、過度な性行為を行う動物においては、その自然が傷つけられる。というのも精子とは、血の力であるが、それが排出されるときには生命力も排出されてしまうからである。そのため寿命は、過度の欲情により短くなり、人間も動物も、死期が寿命より早く訪れるか、体力が減退してしまうのである。そのため人間は、性交の際に突然死

するとよく言われるのである。動物は人間と同様に、つまりメスが下に、オスが上になって性交をする。この方法を動物は決して変えることはない。しかし、ラテン語の原典が述べているように、人間は、その行為において最も秩序を守らない生き物である。というのも、人間の男は、性行為をする時に上下を逆にし、ハリネズミかガチョウのオスのように振る舞い、女の役割を演じるからである。それはもっとも恥ずべき罪なのである。人間以外のいかなる動物もそのようなことはしないからである。

30. ネズミについて

glisとは、ドイツ語でネズミのことで、それには二種類がある。一つはイエネズミ、もう一つはモリネズミであり、後者は小さな動物である。モリネズミは、インドールが述べているように、冬眠中は毳のように体を丸め、眠ることで体が太ってくる。この動物は、樹の上をまるで地面と同じように駆け回り、リンゴ汁を大変好む。プリニウスは、その脂肪をゆでたものを、痙攣にかかった病気の部位に塗ると効果があると述べている。

31. イタチについて

galy (イタチ) とは、アリストテレスによると、大変勇敢な動物である。ヘビと戦って打ち負かすとヘビを呑みこむが、その後すぐに、ヘビが嫌いな草のヘンルーダを食べる。イタチがヘビと戦うのは、ヘビが食べるネズミをイタチも食べるからである。それゆえに、つまりヘビが自分たちから食料を奪うので、イタチはヘビが嫌いなのである。

32. レーセルについて

guessidesとはドイツ語でrösel¹ (レーセル) のことで、これはしばしば水辺に棲む動物である。その糞は、芳香を放ち麝香(ジャコウ)に似た味がするが、その効能は同じではない。この動物には、糞を一ヶ所に集めておくという一風変わった習性がある。人に糞を見つけてもらい、それをそこから何かの役にたつように持っていってもらうためである。この動物は、すべての人の役に立つことにやぶさかではないが、人に姿を見られることが厭で、人前からすぐに逃げだすと言われる。これは、善行が他人の目に止まり、褒められることを嫌う人のことを表している。

33. ヘラジカについて

ibexとは、ガレヌスが述べているように、体が小さく岩場に棲むことを好み、そこで子供を育てるという。そして幾人かの学者たちは、hirz (シカ) と同じ仲間と同じ性格であると述べている。それゆえに私は、この動物は、ドイツ語でälch (ヘラジカ) と呼ばれるものであると思う。なぜならば、それは体が、rêh (ノロジカ) よりも大きく、シカよりも小さいうえに、シカのように大ぶりの角をしているからである。しかしヘラジカの角は平たいが、シカのそれは丸い。ガレヌスは、ヘラジカは体が小さいと述べているが、私はそれをシカに比べて小さいの意味であると理解する。

34. イノブタについて

ibridaとは四足獣で、イノブタのことである。というのもそれは、ちょうどラバがウマとロバから生まれたように、イノシシとブタから生まれたものだからである。それを指すドイツ語本来の名前はないが、ブタの合いの子とでも呼ぶことができよう。それは、tyadrus、つまりヒツジと雄ヤギの合いの子をpokschaf（ヤギヒツジ）と、またヤギと雄ヒツジの合いの子であるmuscusを、つまりドイツ語でschâfgaiz（ヒツジヤギ）と呼ぶのと同じことである。

35. ヤマアラシについて

istrixとは、ドイツ語でdornswein（ヤマアラシ）のことである。ソリヌスは、次のように述べている。この動物は、海辺に好んで生息するのでmersweinとも呼ばれる。しかし、普通我々がmersweinと呼ぶ動物は、それとは別の動物であって、別名イルカと呼ばれるものである。ヤマアラシは、陸上でも水中でも生きることができ、ハリネズミのそれと同じ色をした、長くて固い針がざらざらした背中一面に生えている。この動物が怒る時には、針をまるで矢のようにイヌや人に対して突き立てる。ヤコブスは、ヤマアラシは怒りっぽく、すぐに仕返しをすると述べている。

36. ハイエナについて

ienaはドイツ語でgrabtier（ハイエナ）のことである。というのもプリニウスとソリヌスが述べているように、この動物は死人の墓を住みかとするからである。この動物は、オスとメスの両方の性格を持っている。背骨と首が大変固いので、首が曲げられず、回すことしかできない。ハイエナの影の中に入った獵犬は、鳴き声を失い吠えなくなる。ハイエナはまた、体の色を自由に変えることができる。この動物は、捕まえようとするあらゆる動物の足跡をつけていく。その目には宝石がはまっているとされるが、別の学者たちは、それは額の中だという。ハイエナは、プリニウスによれば、オオカミほどの大きさで、首にはウマと同様の剛毛があり、丈夫な背中をしている。アリストテレスとヤコブスは、この動物は馬小屋に忍び込み、ある人の名前と声を覚えると、その名前を呼んでその人を巧みにおびき出し、殺してしまうと述べている。またハイエナは時折、まるで気分が悪いために咳こんで嘔吐する人のような声を出すと言われるが、それはイヌをおびき寄せて、襲って食べるためである。

37. ライオンについて

ライオンは、ヤコブスとソリヌスの言うごとく、他のすべての動物の王である。ライオンには不誠実さや裏切りは無縁である。ライオンの力強さは、その額と尻尾を見ればわかる。その熱い性格のゆえに、ライオンは常に欲情的あるいは情熱的であると思われる。leēnaとは雌ライオンのことで、雌は子供を初回は5匹、次に4匹、3度目には3匹、その後は2匹、そして5回目には1匹と生むが、その後は出産しなくなる。雌ライオンには、体の胸のやや下の真ん中に二つの乳首があるが、それは体の大きさに比べて随分と小さい。それは、餌がすべて体に吸収され、母乳がほとんどでないため

ある。アウグスチヌスはこう述べている。雌ライオンが出産すると、子ライオンは、父親が来るまで3日間眠っているが、父親が大声でほえるとその声に驚き目を覚ますという。ライオンは、サソリの鋭い針を恐れ、天敵のサソリから逃げて行く。サソリはまた、車輪のぎしぎしときしむ音を恐れるが、火をもっと恐れる。ソリヌスによれば、ライオンは、傷つけられたり、痛めつけられたりしない限り、容易に怒り出すことはないという。しかし怒り出すと、怒らせた相手を引き裂いてしまう。だが相手が倒れると、何もしなくなり、捕えた相手を痛めつけることもしない。ライオンは、空腹に苦しめられない限り、人間を故意に殺すことはない。アデリーヌスは、ライオンは眠っているときでも、おきているという。歩く時には、獵師に見つからないように、足跡を尻尾でかき消す。またプリニウスは、ライオンは互いに平和を好み、争いごとをしなないと述べている。

アリストテレスによると、ライオンは、放尿する時には、犬のように片足をあげる。また口を開けると、臭い息が出てくる。腹が空くと、尻尾で地面に大きな円を描き、大声でほえて他の動物たちを恐れさせその円の中に入らせない。ライオンは前日やその他の残りものを食べることを嫌がる。何人かの人々は、ライオンは自らの怒りのあまりに死んでしまうと言っている。怒りすぎると、体内が異常に熱くなるからである。ライオンは、ロバを好んで捕まえるが、生来ロバを嫌っている。アンブロシウスは、ライオンは病気になる、元気になるためにサルを一匹捕まえ、それを食べると言っている。またイヌの血を飲むと元気になる。ソリヌスとプリニウスはこう述べている。ライオンが尻尾をじっとさせている時には、おとなしく穏やかであるが、それは稀なことである。しかし一度怒り出すと、ライオンは尻尾で地面を叩き、怒りが増すにつれて、自らの背中を尻尾で鞭打つ。また傷を負ったときには、人の群の中から危害を加えた相手を見つけ出し、もしそれが可能な場合には、相手を引き裂いてしまう。しかし自分に矢を射った者がいても、ケガを負わされなかった場合には、罰するために組み伏しても、ケガをさせることはない。

プリニウスによると、ライオンの肉、とりわけその心臓の肉は、冷え性の人には良く効くという。それを食べると、体が温まるからである。ライオンの骨は非常に固いので、それを打つと火打ち石のように火がでる。ライオンの脂は毒に効く。葡萄酒とライオンの脂から作った膏薬を塗ると、ヘビを含むあらゆる動物を寄せ付けぬ効果がある。その脂は、他のどの動物の脂よりも熱い。ライオンは、だいたいいつでも4日熱に罹っているが、その時には、元気になるためにサルの肉を一番欲しがる。ライオンの脂にバラ油を混ぜると人の顔のシミを防ぎ、顔をもとのきれいな状態に戻してくれる。ライオンの首は一本の骨からできているが、その首の筋肉は、まるで一本の腱からなる軟骨のような構造をしているので、首を後ろに反らすことができない。アレクサンダーは、ライオンは胸と前足と尻尾の力が強いと述べている。leonとはギリシャ語で王を意味し、そのためこの動物もleoと呼ばれる。なぜならライオンは百獣の王だからである。ライオンは前脚が熱く、後脚が冷たい性質を持っているため、太陽も獅子座と呼ばれる星座に入っているのである。アリストテレスは、ライオンだけが、大腿骨を除き、骨髄を持たないと述べている。そのためその骨は、イルカを例外として、他の動物の骨よりも硬い。ライオンの内臓は、イヌのそれに似ている。ライオンは、夏になると熱を出す、冬は健康である。また人の姿を見ても熱を出すという。

38. チーターについて

チーターは、ライオンとヒョウから生まれた動物である。雌は雄よりも強く、勇敢である。プリニウスは、チーターから身を守りたい人は、ニンニクを手でもむと、チーターは逃げていき、1時間は近寄らないという。なぜなら、チーターはニンニクの匂いに耐えられないからである。アンブロシウス⁵によると、チーターは内臓の病気にかかると、野生のヤギの血を飲むと病気が治るといふ。また何か毒を食べた時には、人間の糞を探すといふ。それを食べると、元気になるからである。チーターは時に飼い慣らすことができるが、その野生を忘れてしまうほどにおとなしくなることはない。だがうまく飼い慣らせば、狩りに使え、獲物を捕まえさせることができる。狩りのために解き放されたチーターは、4回あるいは5回のジャンプで獲物をしとめないと、怒りのあまりじっとして動こうとしなくなる。そこで、もし獵師が動物の死体を与えてその血を飲ませないと、チーターは、獵師や出会った人なら誰彼構わずに襲いかかる。というのも、チーターは血でしかおとなしくさせることができないからである。そのため獵師は、その目的のために、つねに子ヒツジかその他の動物を連れて歩く。ある人々は、チーターとヒョウは同じ動物だが、名前が二つあるのだと思っている。

39. ヒヒについて

lamia⁶（ヒヒ）は大きく凶暴な動物で、夜に森から人家の庭にやってきては、木を折り、枝を投げ散らかす。それができるのは、どんなことでもやってのけるだけの頑丈な腕があるせいである。アリストテレスは、人がヒヒの噛み傷でケガをすると、その当のヒヒの吠える声を聞くまでは、傷が癒えることがないという。この動物は気が荒いが、子供には乳をあげる。しかしもっと恐ろしく乱暴なのは高位聖職者、司教、司教座聖堂首席司祭、地区長などの聖職者のほうで、彼らは、しもべたちに魂のパン、つまり神のことばを与えず、それをよろこんで与えようとする人たちの仕事を妨害するのである。

40. ラーツァンについて

ソリヌスとヤコブスによれば、lania⁷（ラーツァン）は恐ろしい動物で、その凶暴性からどの動物も安全であるとは言えないという。というのも、大変勇敢なあのライオンでさえも恐れさせるからである。この動物は、同類以外のものとは争うが、仲間同士でけんかをすることはない。また他の動物を略奪する動物を憎む。しかし他の動物の邪悪さを憎んでも、自らの邪悪さには気がつかない。この動物は人間を最も憎むが、これは神のご命令かもしれぬ。なぜならば人間は、あらゆる動物の中で、最も柔和で最も平和的であらねばならないのに、一度怒り始めると最も恐ろしい生き物となるからである。

41. オオヤマネコについて

linxはluhs（オオヤマネコ）のことである。プリニウスとヤコブスによると、オオヤマネコは、厚

い壁も透視するだけのよく見える目をもっている。だが私はそうは思わない。その舌はヘビの舌に似ているが、それよりも大きい舌を前へ長く突き出す。オオヤマネコの尿から*ligurius*⁸と呼ばれる宝石ができる。それは、後に「宝石」の章で見ると、ジルコンのような色をしている。オオヤマネコは、尿を放出すると、意地悪をして人に見つからないようにその場所を隠す。ところで、その宝石が何の役にたつのかについては、また後で説明する。

42. オオカミについて

*lupus*はオオカミのことで、その動物は嘘つきで泥棒である。オオカミは、漁師たちが海岸で網を乾かすために干そうとすると、そこに魚のおこぼれを残しておかないと、網を引き裂いてしまう。オオカミは、柳の枝を口にくわえ、ヤギがその上を通るまでじっと隠れて捕まえるのである。オオカミは草の上を歩く時、音をたてたり、イヌに聞こえないようにと、足の爪を舌で舐めて濡らす。オオカミはヒツジ小屋に入って、一頭のヒツジを殺して食べても、空腹を満たすだけでは足りず、全部のヒツジを殺し、それを山のように積み上げる。

オオカミの毛は、時として虫だらけである。アリストテレスは、オオカミの血とその糞は、ラテン語で*colica*と呼ばれる子宮の痛みに効くことがあるという。オオカミの目は、昼間は良くないが、夜はよく見える。プリニウスによると、オオカミは人間から危害を受ける心配がないとわかると、性格が穏やかになり、草原を疾走せず ゆっくりと歩く。アンブロシウスは、あなたがオオカミに気がつくよりも早く、オオカミがあなたに気がつく時、オオカミはあなたから声を奪ってしまうという。声を奪われた時には、声を取り戻すために、衣服の前を開けるとよい。

オオカミがあなたを襲おうとしている時には、石で身を守りなさい。オオカミは石を恐れるからである。オオカミが追いかけてくる時には、あなたの姿がよく見えるように後ずさりをして、あなたとオオカミの間に、石でも木でも何でもよいので、何かを置きなさい。そうすれば、オオカミは畏が仕掛けられたと思ひ込み、それ以上ついてこなくなるからである。

肉を食べる動物の中で、人間とクマとを除き、草を食べて腹痛や病気にならないものはいない。オオカミは人肉に味をしめると、それをもっと食べたくなる。というのも人肉は他のいかなる肉よりも食べるのに適しており、美味であるからである。それゆえオオカミは、命を賭して人間を求めるのである。オオカミには、火を怖がる性質がある。

狂犬病のイヌに噛まれた傷に効く薬は、オオカミの噛み傷にも効く。オオカミと狂犬病のイヌの毒は同じだからである。オオカミが垣根を越えてあるいはそれに沿って歩きながら、ヒツジを密かに狙う時に、オオカミの片足が垣根に触れて音を立てると、オオカミはまるでそれをなじるかのように、自らの足に噛みつく。オオカミの脳は、月の満ち欠けによって大きくなったり小さくなったりする。それは他の動物も同様であるが、オオカミとイヌにおいて著しい。オオカミの心臓を炙って粉にし、癩癩にかかっている人に飲ませると効果がある。ただしこれは、その後で性交をしない場合に限る。乾燥させて保存しておいたオオカミの心臓は、よい香りを放つと試してみた人が語っている。

43. リンゼンについて

linsius⁹（リンゼン）は、雌オオカミとイヌから生まれた四足獣である。というのも、この動物のいずれもが淫乱なので、互いに対する生来の敵対心を忘れ、欲望のまま交わるからである。そのため、両者の子供であるリンゼンは、両方の皮膚の色と性質を受けついでいる。というのも力が強く、凶暴だからである。

44. レオカッフェについて

leocophana¹⁰は、ソリヌスとヤコブスによると、小さな動物だという。それを捕まえて焼いて粉にし、ライオンの足跡に撒いておく。するとそれに触れたライオンは死んでしまう。そのためライオンはその動物を大変嫌い、見つけた時には、引き裂いて殺すという。しかしその動物は、尿をライオンに振りかけて応戦する。というのも、ライオンには尿が致命的であることを知っているからである。

それゆえ人間も、改心した人々の良き行いと謙虚さを、彼らを見習って改心するようにと、傲慢な人々の道に撒くべきである。

45. ウサギについて

lepusはウサギのことである。ウサギは臆病な動物なので、餌を探すのは夜に限り、昼間はめったにしない。プリニウスは、ウサギは決して太らなると述べている。噂によると、イタチはウサギをからかって疲れさせ、喉を噛み切ってから食べるという。ウサギの肺は、それを目にあてると目に効く。またそれをすりつぶして湿らせたものを足に塗り込むと、疲れた足を回復させる効果がある。ウサギの凝塊は、ひどい下痢に効果がある。ウサギは後脚が前脚よりも長いので、下りよりも上りのほうが楽にすばやく走ることができる。ウサギは目を開けたまま眠る。ウサギは飼慣らすことができるが、いつもじっとして体を動かさないと、腎臓に脂肪が付き死んでしまう。

46. カワウソについて

luterとはカワウソのことである。カワウソはずる賢く抜け目のない動物で、池や川のほとりに棲み、その大きさはネコほどで、頭を除きその体型も良く似ている。この生き物は、長く水中で生活することができるが、やはり空気を体内に吸い込む必要がある。それゆえ時として、魚を追って築に入りこみ、捕まえた魚といっしょに再び抜けでることができない時には、水中で窒息死することがある。カワウソはまた大食漢なので、その住まいの穴に集めた魚が腐ってしまい、穴だけでなく、その周辺の空気が悪臭を放つ。人々の中にはこのことを体験し、ひどい目に遭った人もいる。

47. ロクストについて

locusta¹¹は、ヤコブスが述べているように、ヨルダン川付近の東洋の国々に棲む四足獣である。そ

の体は小さいが、大きな頭を持ち、肉がたくさんついていて食することができる。それゆえ『福音書』を読むと、ヨハネはロクストを食べて生きたとされる。この動物は群れを組んで移動する。そのため、ロクストは王を持たないと言われる。しかしこの習性は、やはりラテン語でlocustaと呼ばれるイナゴにはあてはまらない。というのも、イナゴはまれにしか群れをなさず、ばらばらに飛び跳ねるだけだからである。アリストテレスはロクストについてこう述べている。ある女性が一匹のロクストを自分の家でまだ小さい時分から育てていたが、成長するとそれは、オスの協力なしに身ごもったという。それゆえロクストは、メスがオスなしでも妊娠する四足獣である。

48. ラバについて

mulusはラバのことで、力が強く、多くの仕事をこなす動物である。これは雄ロバと雌ウマの雑種で、それはちょうどラテン語でburdo（ケッティ）が、雌ロバと雄ウマの合いの子であるのと同じである。

49. 獵犬について

molosusとは（イノシシ狩りの）獵犬のことである。それは大きなイヌで、その大きなものはロンバルディー地方に見られる。アデリーヌスによると、この動物は、人なら誰でも襲うほどに力が強く、凶暴であるが、人間の子供が無垢で弱いことをよく知っていて、彼らに打たれると逃げてしまう。そのことを私自身、メーゲンベルクやその他の場所で目撃した。

50. ジャコウについて

musquelibetは、ドイツ語でpisemtier（ジャコウ）のことである。プリニウスは、それはノロジカ程の大きさで、東洋の国々に棲むと言う。この動物の体には、分泌物が溜まって腫れものができるが、それが十分に化膿すると、この動物はそれが割れて膿が流れ出るまで体を木に擦りつける。それが固くなったものが、ラテン語のmuscus、ドイツ語でpisem（麝香）と呼ばれるものである。乾燥していやな匂いが消えた麝香は、めまい、心臓麻痺、さらに脳・肝臓・胃の働きの低下に効く。

51. ネコについて

musio, murilegus, cattusはネコのことで、ネコは大変ずる賢い動物であるとヤコブスは述べている。それは目が効くので、暗闇でもネズミが見える。盛りが付くと乱暴になる。ネコは、ネズミを捕まえる縄張りを確保するために、激しいけんかをする。口の周りに長いひげがあるが、それがなくなると、勇敢さも失せてしまうという。おとなしいネコが野性に戻ろうとするときには、耳を切り落とすとよい。すると雨の滴が顔にかかり、森にいられなくなって、再びおとなしくなるからである。

ネコは仲間のことを大変大事にするので、深い井戸の縁に座り、水面に自分の姿が映ると、それを仲間だと思い、嬉しくなって飛び込むのだという。それは、発情期の雌ネコがオスを探し求めるとき

に、またとりわけ経験の少ない若いネコに、特によく起るといふ話である。

【訳注】

（訳注は、テキストの前半部分の訳（『文学部論叢』第104号、2013年、pp.89～105に掲載）の中で既に解説した事項については、本稿では省略した）

- 1 falena：詳細不明。しかし、ニュルンベルク写本の挿入図（図2）からすると、それはオオカミあるいはイヌに近い姿をしている。
- 2 furuncululus：ラテン語で「小さな泥棒」の意。Schulzは「イタチ」と解釈しているが、ここではSollbachに倣って「ハムスター」説をとる。
- 3 furiôn：詳細不明。
- 4 rœsel：詳細不明。
- 5 Ambrosius：アンブロシウス（339-397）。聖人。古代西方教会の四大教会博士の一人。代表的な著書に『六日間天地創造論』（Hexaemeron）がある。
- 6 lamia：『図説 ヨーロッパ怪物文化誌事典』（p.224）によると、吸血鬼・魔女・妖女と見なされることもあるという。
- 7 lazania：詳細不明。
- 8 ligurius：詳細不明。オオヤマネコの胆石のことか？
- 9 linsius：詳細不明。
- 10 leocophana：詳細不明。
- 11 locusta：詳細不明。なお『マタイによる福音書』（3、4）には、「ヨハネは、ラクダの毛皮を着、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食物としていた」とある。

【参考文献】

1) テキスト：

Konrad von Megenberg: Das Buch der Natur. Die erste Naturgeschichte in deutscher Sprache. Herausgegeben von Franz Pfeiffer. Georg Olms Verlag Hildesheim · Zürich · New York (3. Nachdruck der Ausgabe Stuttgart 1861) 1994.

Konrad von Megenberg: Das ›Buch der Natur‹. Band II Kritischer Text nach den Handschriften. Herausgegeben von Robert Luff und Georg Steer. Max Niemeyer Verlag Tübingen 2003.

Gesamtverzeichnis Autoren/Werke Konrad von Megenberg: 'Buch der Natur'. Handschriftencensus: Eine Bestandsaufnahme der handschriftlichen Überlieferung deutschsprachiger Texte des Mittelalters (<http://www.handschriftencensus.de/8282>, 最終閲覧日：2013年11月9日).

2) 翻訳：

Das Buch der Natur von Conrad von Megenberg. Die erste Naturgeschichte in deutscher Sprache. In Neu-Hochdeutscher Sprache bearbeitet und mit Anmerkungen versehen von Dr. Hugo Schulz, Professor an der Universität Greifswald. Verlag und Druck von Julius Abel Greifswald 1897 (<http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/Schulz1897/>, 最終閲覧日：2013年10月30日).

Das Tierbuch des Konrad von Megenberg. Ins Neuhochdeutsche übertragen und eingeleitet von Gerhard E. Sollbach: Die bibliophilen Taschenbücher Nr. 560. Harenberg Kommunikation, Dortmund 1989.

3) 研究書 :

Feistner, Edith (2011) (Hrsg.) : Konrad von Megenberg (1309-1374) : ein spätmittelalterlicher ‚Enzyklopädist‘ im europäischen Kontext. Unter redaktioneller Mitarbeit von Nina Prifling. Jahrbuch der Oswald von Wolkenstein-Gesellschaft Band 18 (2010/2011) Reichert Verlag Wiesbaden.

Lexikon des Mittelalters (1999). 9 Bde. , Metzler Verlag Stuttgart/Weimar.

Spyra, Ulrike (2005) : Das »Buch der Natur« Konrads von Megenberg. Die illustrierten Handschriften und Inkunabeln. Bohlau Verlag Köln/Weimar/Wien.

【フィシオログス】オットー・ゼール、梶田昭訳、博品社、1994年。

蔵持不三也 (監修)、松平俊久 (著) : 『図説 ヨーロッパ怪物文化誌事典』原書房、2005年。